こんな夢をみた

二夜目

go to one's dreams

こんな夢をみた。

霧の深い夜、瓦斯灯のぼんやりしたあかりを頼りに歩いている。

傍らであなたが

「最近巷を賑わす切り裂き魔なんだ」

と唐突に語り出す。直に私も首を切り裂かれるのだろう。

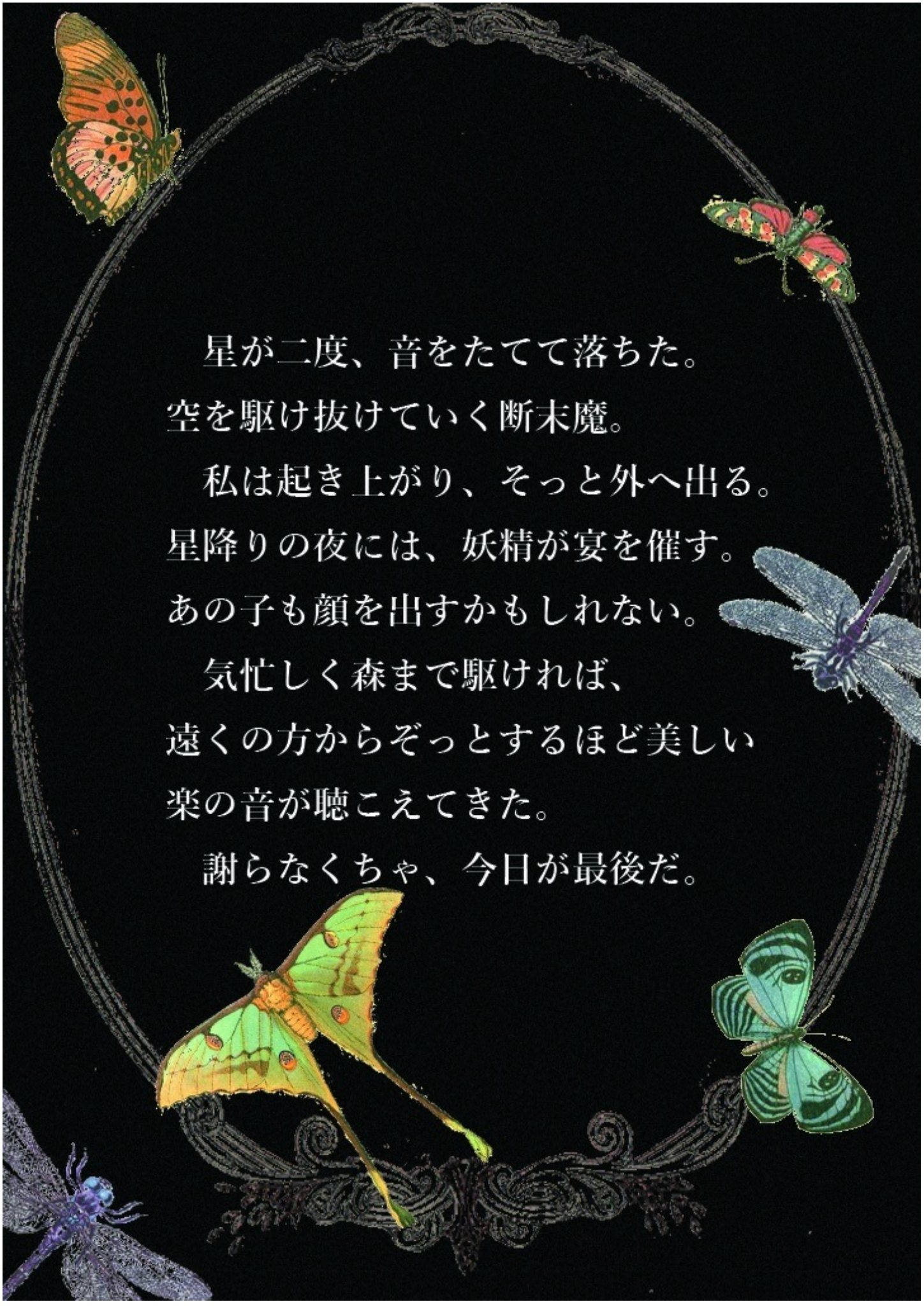
あなたが覚えてくれればよかった。

忘れないでいてくれるなら、この身を切り刻んだって良かったのに。

私は雪片だった。
ひらひらと、
だれかの
瞼に落ちて溶けた。
涙のようだ、と思った。
「涙みたい」
だれかも呟いた。

口にしなかった言葉も、
たぶん
消えるわけではないのだろう。
静かに降り積もって
やがて私を脅かす。

一言、
言えば儚く溶けるだけのものでも。



　星が二度、音をたてて落ちた。
空を駆け抜けていく断末魔。
　私は起き上がり、そっと外へ出る。
星降りの夜には、妖精が宴を催す。
あの子も顔を出すかもしれない。
　気忙しく森まで駆ければ、
遠くの方からぞっとするほど美しい
楽の音が聴こえてきた。
　謝らなくちゃ、今日が最後だ。

こんな夢をみた。

寂しがりなお姫様がいた。

彼女に仕える者は数多といたけれど、

ずっと独りだった。

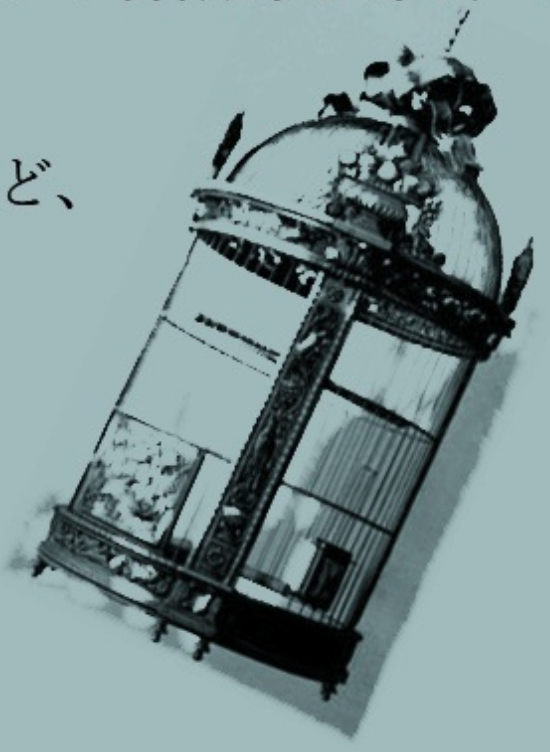
ある時、気まぐれに魔女がお姫様に空っぽの鳥籠を手渡した。

姿のない小鳥が居るそうだ。

確かに、クロウタドリの特徴的な鳴き声が聴こえる。

それでも寂しいけれど、

昔よりはよかった。



シャンパングラスに注がれた夜空を頂く。

ぱしぱしと弾ける星々のきらめき、

闇の深いあわいの美しさ。

口にすれば、ほのかに甘い。

「太陽は如何？ 」

ウェイターがにっこりと、

盆に載せられた光を

すすめてくる。

「朝焼けをあなたにも」

謎を集める男がいた。
ささやかな疑問も、巨大な陰謀も等しく集める。
そして首だけの美しい娘に語るのだ。
　目を閉じ、静かに聞き入っていた娘は、
しばらくするとその謎を囀ずるように解き明かす…

そこで目が覚めた。
あんな少女がいれば、確かに謎を
収集し続けるだろうと思った。

私は、猫を溺愛する王の妻だった。
時が過ぎ、美しさに翳りが出た猫を
嘲笑いながら私は言う。
「お前は死ぬよ、私より先に」
「それでも王は貴女より私を愛するでしょう」
悲しげに猫は応えた。

そこで目が覚めた。
哀れなのはどちらだったのか、
わたしはまだ決めかねている。

　私は檻のなかで歌う人魚に
恋をしている。
「なにがほしい？」
「…二本の脚と自由」
　美しい声に誘われて、私は
両足を差し出そうと…
そこで目が覚めた。

盲目的な想いは端から見て
滑稽であろうが、それだけ
一途になにかを想えるならば
しあわせだろう。

その時に永遠を信じれるなら。

小さな箱のなかで、あなたが
眠っている。
やわらかい頬のラインを視線で
なぞり、長い睫が淡く落とす影を
みている。
そこで目が覚めた。

触れたいと願うのに、
いつのまにか触れることを
恐れていた。
だいじょうぶ壊れないよ、
と笑うあなたを思い出して、
少しだけ泣いた。

ここ半日分ほど［15時］が
動くことはなく、まわりの大人たち
はずっとお茶会を繰り広げている。
時間が好き勝手動くようになって百年。
決まった［1時間］に
決まった行動をするようになって
五十年ほど。
私は手元の時計の針を、一気に
0時に合わせる。
太陽は沈み、深い闇が迫る。

こんな夢をみた 二夜目

http://p.booklog.jp/book/91870

著者：こいけ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/38a1db/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/91870

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/91870

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ